

気球船



第 222 号

平成 20 年 11・12 月
文 部 科 学 省
初 等 中 等 教 育 局
国 際 教 育 課
編 集 ・ 発 行
初 版 発 行 昭 和 62 年 12 月

海外子女教育総合HP: http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/main7_a2.htm

巻頭言

平成20年度東アジア・大洋州地区 校長研究協議会に出席して

国際教育課課長 大森 摂生

標記会議は、11月12～14日、豪州メルボルンにて開催されました。私は、文部科学省より本会議に出席し、各日本人学校の校長先生方とお話をする貴重な機会を得ましたので、この機会に議論のあった点について、この地域以外の先生方も共有しておきたいと考え、筆をとった次第です。

先ず、この協議会に前後して、国際教育課より、来年度に新規に派遣される教員数について、厳しい内容のメールを送付しましたが、それに対して「何とかならないものか」という反応を多く頂きました。この地域は日本と近く、日本の経済活動が活発に展開されている地域ですので、日本の子どもたちの数も増加傾向にあり、また、北米のように英語で授業を行う低廉な現地校も少ないために、必然的に日本人学校の生徒数は伸びている傾向にあります。子どもの数が増えているのは数字で明らかであるのに、何故、派遣教師の数が伸びないのか、というのはもっともな疑問であることはよく承知しています。他方、日本の各地から、「外国の日本人学校で教鞭を執ってみたい」と手を挙げられる先生の数や、各都道府県からそうした先生を推薦していただく数は、減少傾向にあり、十分な教師数の確保に極めて苦労しているという現実があります。また、公務員の定数抑制という政府の大方針は、国内の教員数はもちろん、海外派遣の教員にもかかっており、平成18～21年度の4年間で約130名以上の派遣教員の定数削減を行わなければなりません。また、世界中には子どもの数が非常に増加している学校もあれ

ば、非常に減少している学校もあるわけですが、後者について、それが文部科学大臣認定校として存続していくための教育レベルを維持するためには、一定の派遣教員数を確保することが大きな要素であり、単純に児童生徒数が少なくなったところから増えているところへ回すというわけにもいきません。現在、国際教育課では、こうしたことを勘案しつつ、来年度の配置計画を策定しているところですが、21年度は増員の対象となる学校はおそらくないだろうというのが現在の見通しです。

次に、多くの校長先生から、特別支援教育を必要とする子どもがおり、専門性を有する教師の派遣を希望するとの声が聞かれました。実は、毎年の予算要求において、特別支援教育に対応するための定員増は盛り込んでおりますが、全体の定員改善もままならない中で、特別支援教育を担当する教員の確保については、財政当局の理解が得られないまま今日に至っています。特別支援学校の先生でなくとも、特別支援教育の指導経験を有する先生でもいいとの切実な声も頂戴しましたが、こうした人材を毎年一定数確保することは困難な状況です。

各日本人学校の校長先生は、こうした問題について、運営委員会や保護者の方々から指摘を受けておられるようですが、率直に言って即効的な解決策はありません。世界中の運営理事会の責任者が一堂に集う場もありませんので、私は、校長研の場で、こうした問題については、文部科学省として、運営委員会の責任者の方々に直接説明したく、それぞれの学校に戻られたら、是非、運営委員会の関係者の方が帰国の際は長時間があれば、文部科学省の国際教育課にご足労いただき、日頃から感じておられる疑問や意見を直接ぶつけるよう伝えてほしいと申し上げまし

た。実際に、その後何人かの方々が当省を訪ねて来られました。

我々としては、地道にこうした努力を続けていきたいと考えております。しかし、究極的には、現在の応募者と定数の減少傾向に歯止めをかけなければ、問題の緩和にはつながらないと思います。いずれも、一義的にはわれわれ文部科学省の責任ですが、応募者の確保については、是非、これを読んでおられる先生方が、無事に任期を終えてそれぞれの国内の現場に戻られた際に、外国で教えることのすばらしさについて、周囲の先生方に伝えていただきたいと思います。我々が毎年面接で派遣を希望される先生方とお話をしている、以前から海外で教えてみたかったが、いろいろな事情でかなわなかったという声をよく伺います。こうした先生方の後押しについて、皆様の御協力をいただければ心強く感じる次第です。



トピックス

平成20年度補習授業校派遣教員研究協議会に参加して

国際教育課課長補佐 内藤 雷太

去る、10月6日から10月7日までの2日間、森嶋初等中等教育局視学官とともに、サンフランシスコで開催された補習授業校研究協議会に出席致しました。また、協議会の前に、グアダラハラ補習授業校、日本メキシコ学院日本コースを訪問しました。

以下、研究協議会及び各校の訪問について報告したいと思います。

1. 補習授業校研究協議会(サンフランシスコ)

10月6日～7日の2日間サンフランシスコで開催された補習授業校研究協議会に参加しました。

実際は、10月5日に個別面談を実施したので3日間の参加になりました。

今回の協議会では、改訂された教育指導要領

について、森嶋視学官から説明を頂き、同テーマについて非常に活発な議論が交わされました。

また、外務省(在サンフランシスコ日本国総領事館)の小川領事から海外子女数、平成21年度の概算要求、安全対策、外務省が提供する渡航情報、公用旅券の管理について説明があり、海外子女教育振興財団の根道専務理事からは、「在外教育施設のためのご利用ガイド」に沿って説明があり、小生からも文部科学省における海外子女教育の現状と課題及び免許更新制についての説明を行った。

補習授業校は、日本人学校と授業の実施形態、運営委員会等との関係において異なっており、派遣されている教員にとって教育以外の面でも様々な対応が求められることが多く、ご苦勞をされていることを、改めて認識させられました。

特に平成19年度から新たに派遣されているシニア派遣の先生方におかれては、年齢から来る健康上の問題を抱えながら、新たな気持ちで海外で教育に携わっている現状をお聞かせいただき、今後のシニア派遣制度の在り方に非常に参考になりました。

また、補習授業校は、1人しか派遣されていない学校が、ほとんどであり、運営委員会及び在外公館の絶大なサポートが必要であることを、改めて認識しました。さらに、個々の補習授業校においては、保護者の様々なニーズに対応するために大変なご苦勞があることも改めて確認させていただきましたので、今後の補習授業校の支援方策の参考にさせていただきます。

2. グアダラハラ補習授業校訪問

10月2日メキシコにあるグアダラハラ補習授業校を訪問しました。

グアダラハラ補習授業校は、世界に4校しかない準全日制の補習受講校です。補習授業校で学ぶ子どもたちは、昼間は、現地校又はインターナショナルスクールに通い、夕方(16:00～19:45)に補習授業校に通ってきます。週5日間、授業科目は、国語、算数(数学)、社会、理科、生活となっています。運営委員会の強力なバックアップの元、派遣教員と現地採用教員が協力して教育に当たっており、環境的に恵まれた校舎の中、ダブルスクールという時間的には厳しさはあるものの子どもたちが、明るく元気に学んでいる姿が非常に印象的でありました。

3. 日本メキシコ学院日本コース訪問

11月3日グアダラハラからメキシコシティに向かい、日本メキシコ学院日本コースを訪問しました。

日本メキシコ学院は、日本人の子どもが通う日本コースとメキシコ人の子どもが通うメキシココースが併設されているのが特徴である学校です。

規模の大きなメキシココースが併設されているので、施設が非常に充実しているとともに、メキシコの子どもたちが、同じキャンパスの中で学んでいることにより、他の日本人学校よりもキャンパス内に国際的な雰囲気が漂っていました。

ただし、他の中南米の日本人学校と同様に治安が、悪化（特に誘拐が増加しているようです。）しているようで、子どもたちの通学には日本コース、メキシココースとも大変気を遣っていました。

各学年の授業と学校の施設を見させていただくとともに、教員の皆さんと意見交換することができ、非常に有意義な訪問となりました。

また、校庭で児童からもらったメキシコのドンダリは記念のおみやげになりました。

4. 最後に

最後になりましたが、補習授業校研究協議会の開催にあたりご尽力いただいた、サンフランシスコ補習授業校の植木校長、木下教頭、井上教頭、学校関係者の皆様、また、訪問させていただいた、グアダラハラ補習授業校の長田先生、運営委員会の皆様、メキシコ日本学院日本コースの齋藤校長、運営委員会の皆様、大変お世話になりました。この場をお借りして御礼申し上げます。ありがとうございます。

今後とも学校で学ぶ子どもたちのためによりしく願います。



平成20年度中南米地区校長研究協議会に参加して

国際教育課専門官

(併)教職員派遣係長 小寺 和宏

10月19日(日)～29日(水)の11日間、宍戸視学官と中南米地区校長研究協議会に出席し、その前後でニューヨーク日本人学校とリオ・デ・ジャ

ネイロ日本人学校を視察しました。

校長研究協議会は、外務省、文部科学省、海外子女教育財団からの事務連絡、宍戸視学官の講話、文部科学省提案協議テーマ及び中南米地区協議テーマに沿った交流・討議を中心に進められました。

中南米地区すべての日本人学校の校長先生方が一堂に会される機会は年に1回の校長研のみということで、充実した協議会となりました。

以下、項目等ごとに報告します。

1. 中南米地区校長研究協議会

本年度の中南米地区校長研究協議会はブラジルのマナウスで行われました。

マナウス市はアマゾナス州の州都であり、アマゾン河の河口から約1,500kmの内陸部に位置します。

校長研究協議会は、10月22日(水)～24日(金)の3日間の日程で行われました。

本年度の文部科学省提案協議テーマは「改訂小・中学校学習指導要領の移行措置並びに移行期間中における学習指導について」でした。協議テーマ設定のねらいは、現行の小・中学校学習指導要領から平成20年3月に公示された改訂小・中学校学習指導要領に移行するために必要な措置について、改訂の趣旨を十分に理解し、円滑な移行に努めて頂くことにあり、各校の改訂に係る研修の充実と、具体的なカリキュラム編成等について交流・討議が行われました。

また、宍戸視学官より「新しい学習指導要領と移行措置並びに移行期間中における学習指導について」講話があり、新しい学習指導要領の理念・内容、移行期間中の学習指導を中心に具体的なポイントが示されました。

在外は、移行期間中における学習指導等の情報が少ないことや、各校独自の現行カリキュラムとの調和をいかに図るか等々、課題も多く、今後相互の連携を深めながら推進することも確認されました。

地区別協議テーマは、ブエノスアイレス日本人学校より「派遣教員のリーダーシップと意欲向上に対する方策」について、グアテマラ日本人学校より「児童・生徒の減少に対する方策」について、パナマ日本人学校より「学校安全管理のあり方」について具体的な提案があり、その後、各校の取組や課題、さらに今後の方向性について討議されました。

2. マナオス日本人学校訪問

10月23日(木)にマナオス日本人学校を訪問しました。

運営委員、中西校長をはじめ総勢11名の教職員、保護者の方々に迎えられ、教務主任の先生より教育課程等の説明の後、各クラスの授業を参観させて頂きました。

それぞれに工夫された授業でしたが、3年生(2名)の理科の授業「太陽のうごきをしらべよう」では、マナウスと日本の影の向きと太陽の動きを比較する活動を通して、影の向きと太陽の動きを関係づけるというものでした。

正直、小3ではマナウスと日本の比較は難しいのではないかと観ていると、2人の児童と先生の息がぴったりで、お互いの意見に刺激されながら、自分の考えを自分の言葉で表現し、結論を導くと同時に、新たな疑問を引き出していました。

日々、先生が授業の中で何を大切にされているかが伺える授業でした。

授業後、全児童生徒による歓迎の歌声があり、建物が揺れんばかりの迫力でした。上級生が下級生を指導し、子ども達の手で進められる心温まる会でした。小規模校ならではの一体感と子ども達の自主性を感じました。

子ども達の歌声、歌う姿勢に「学校大好き」というメッセージが込められていました。

3. ニューヨーク日本人学校訪問

10月20日(月)ニューヨーク日本人学校を訪問しました。

ニューヨーク日本人学校は、ニューヨーク州と隣接するコネチカット州の最南端に位置するグリニッチ町にあり、アメリカ有数の高額所得者が住む町としても有名です。

学校周辺は閑静な高級住宅地で文化財の保護等歴史的な環境に恵まれており、地域の一員として地域との調和をはかり理解を深めることが学校発展に欠かせないものとなっています。

学校を訪問した際、三井校長より教育内容及び学校経営に係る現状と課題等のご説明を頂いた後、授業を参観しました。

ニューヨーク日本人学校の本年度の重点目標は「言語活動の充実を図る」とされ、国語の授業は勿論のこと、それぞれの教科授業において言語活動の充実を図り、授業の質の向上、授業力アップを推進されていました。また、平成18年度からウエストチェスター・フェアフィールド・へ

ブライ・アカデミー(WFHA)校とのキャンパスの共有を受け、子ども達の主体的な発想を活かしながら、アメリカ社会の理解が自然に身につくようにするため様々な場面をとらえて交流を深められていました。

4. リオ・デ・ジャネイロ日本人学校訪問

10月27日(月)リオ・デ・ジャネイロ日本人学校を訪問しました。

リオ・デ・ジャネイロ日本人学校は、中心地から車で20分ほどのサンタ・テレザにあり、学校からは、カリオカ山塊の最高峰のコルコバードの丘にそびえ立つキリスト像が見えます。

一時は400人を超える児童生徒が学んだリオ・デ・ジャネイロ日本人学校ですが、児童生徒数の減少により、授業形態の工夫や学校予算の見直し、諸活動の効率化、学校周辺の治安の問題、校舎の老朽化の対策等が求められています。

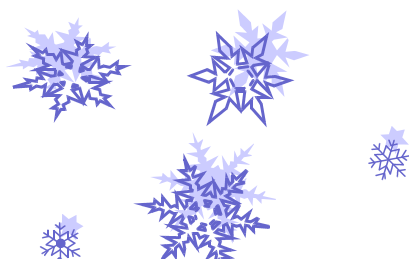
授業を参観させて頂きましたが、大越校長を中心に、それぞれの先生方が地域の特性を生かし、いかに教育の質を向上させるかに力を注がれているのかよくわかる授業でした。また、運営委員さんとの協力体制も素晴らしく、教育に対する情熱をひしひしと感じる学校でした。

5. 最後に

最後になりましたが、中南米地区校長研究協議会の開催にあたりご尽力頂きました幹事校(アスンシオン日本人学校)の新井校長、開催校(マナオス日本人学校)の中西校長、をはじめ学校関係者の皆様、そして、ニューヨーク日本人学校三井校長、リオ・デ・ジャネイロ日本人学校大越校長をはじめ学校関係者の皆様方には大変お世話になりました。

この場をお借りして御礼申し上げます。ありがとうございました。

各校の運営委員会、校長をはじめとする学校スタッフ、学校関係者の皆様方の日本人学校に対する熱い情熱を感じ、身の引き締まる思いがする出張でした。



平成20年度東アジア・大洋州地区校長
研究協議会に参加して
～ 5,000の瞳とタピオカ畑と
36人の Captain cook ～

企画調査係 山本 剛

11月9日から11月15日にかけて、永井視学官、大森国際教育課長とともに、タイのバンコク、シラチャ及びオーストラリアのメルボルンを訪問いたしました。

1. バンコク日本人学校訪問

まず、タイではバンコク日本人学校を訪問させていただきました。

印象的だったのはその規模の大きさ。小学部・中学部合わせて2,500名を超える児童生徒を抱える同校は躍動していました。これまでそれほど多くの学校を見てきたわけでもありませんが、国内では、少子化の流れもあって、それほどの規模の学校はもはや見られないのではないのでしょうか。私が感じた同校の躍動を生み出しているのは、やはりこの2,500人という規模があってこそものだと思いますし、学校にはある程度の規模が必要不可欠であることを再確認させられた思いです。

そして、子どもたちの輝く目、止めどなく私たち訪問者に浴びせられた「こんにちは」の挨拶。学校理事会と校長をはじめとする日本人学校の先生方による学校運営が非常にうまくいっていることの現れを、こういった形で目の当たりにしようとは、正直なところ、出国時想像だにしていませんでした。

2. シラチャ日本人学校建設地訪問

続いて、バンコクから車で一時間半ほど移動し、シラチャ日本人学校建設地を訪問いたしました。

シラチャ日本人学校は来年4月の開校を目指しており、まさに校舎を建設中。12月末の校舎引渡しに向けて着々と準備が進んでいました。

周囲をタピオカ畑で囲まれる中、バンコクから伸びた幹線道路の脇に建設中のその校舎は、高い天井に広い廊下、自然の光を校舎内に取り込むような造りとなっており、ゆったりとした空間の中

で、伸び伸びと教育を受けられる環境ができあがりそうです。

バンコク日本人学校の設置主体である泰日協会がバンコク日本人学校との一体運営を行うということで、バンコクのノウハウを引き継ぎながら、そこにシラチャの地の特殊性を織り交ぜ、しっかりとした学校経営が期待されるところです。



3. 東アジア・大洋州地区校長研究協議会

バンコクの後にはメルボルン。今年度の東アジア・大洋州地区日本人学校校長研究協議会(以下、校長研)は、メルボルン日本人学校を幹事校とし、近隣の日本人学校にもご協力いただきながら、メルボルンの「メルキュール・ホテル」にて開催されました。



会場は緑豊かな公園に隣接し、周辺は行政機関が集まっており、また会場のホテルから5分ほど歩いたところには、18世紀後半にオーストラリア東海岸に到達し、領有を宣言したキャプテン・クックの小屋がありました。校長研冒頭、メルボルン総領事館小竹首席領事のご挨拶の中で、「日本人学校の校長先生は困難の中、船頭に立つ、まさ

にキャプテンクックのような存在である」と紹介されたのは印象的でした。

私の企画調査係と日本人学校との接点は開校当初の認定の時くらいしかありません。今回、36人のキャプテン・クックたちと直に接し、日本人学校を巡る状況や抱える問題点をお聞きできたこと、また、実際にメルボルン日本人学校を訪問させていただき、海外で学ぶ子どもたちの様子を拝見できたことで、日本人学校をより身近に感じることができるようになり、帰国後仕事をする中でも、より思考が具体的になったように思います。

4. おわりに

当課に配属になって4ヶ月。前職は宇宙開発の関係の部署でしたので、全く畑違いの分野にお邪魔し、一つ一つ教えてもらいながらやっと少しずつ慣れてきたと個人的には思っています。そんな中、日本ではなく、海外のまさに現場の地で、活躍する日本人学校関係者の皆さんにお会いできたこと、そして子どもたちの笑顔に直面できたことは、私にとって刺激的でした。

このような機会を得られたことは、幸運以外の何ものでもありません。お世話になった関係者の皆様に感謝申し上げるとともに、今後、微力ながらも、私なりに何らかのお役に立てればと思うばかりです。



世界の窓

ビバ、メヒコ！

日本メキシコ学院日本コース
校長 齋藤 秀峰

生まれて初めて乗る飛行機が、在外教育施設日本メキシコ学院日本コースへの赴任でした。

2008年3月13日午後5時半メキシコシティベニートファレス空港着。夕暮れ時の空港は、所々黒っぽい土も見え、明るい成田空港とは違い、気がめいりそうな心理状態に追い討ちをかけるような雰囲気でした。

空港から住居に向かう車窓から見える風

景は、車のラッシュ、それも、日本とは違い、いつ交通事故が起きても不思議ではない狭い道路を高速で走行する多くの車。(この道路で、運転できるのか)これが、メキシコでの第1印象でした。

あれから、5ヶ月が過ぎました。車の走行、食事、言葉、習慣等々、日本とは、あまりにも違いすぎるメキシコでの生活に当初、驚きの連続でした。

しかし、今では、多少生活にも慣れ、落ち着いた生活を送れるようになりました。しかし、家にいる家族にとっては、今でも治安上、自由に行動できる事は制限されているためストレスはたまります。それを週末の買い物やドライブで発散させるよう努めています。

さて、私が勤務している日本メキシコ学院日本コースは、他の日本人学校と大きく違う点があります。それは、同じ敷地内に日本の教育制度に従っている日本コースとメキシコの教育制度に従っているメキシココースの2つの学校が存在しているということです。

日本コースは、小学部・中学部合わせて145名(8月27日現在)。メキシココースは、幼・小・中・高等部を合わせて845名(8月25日現在)。

日本コースには、幼稚園はないので、派遣教員の子どもの中には、幼稚園では、メキシコの子ども達と一緒に学んでいる子どもさんもいます。

幼稚園も日本コースに入学予定の子ども達は、前年の6月に就学前面接を行い8月には、組替えが行われ特別なプログラムで教育が行われます。

小・中学部ともメキシココースとの交流学习も教育課程の中に組み込まれ、学院朝会、交流学习、クラブ活動、それに、運動会等と一緒にされます。

そこには、言葉の壁もあるので、スペイン語の後には、日本語で通訳します。その逆もあります。その通訳の役割を担ってくれるのが、メキシココースで子ども達に、日本文化や日本語の指導等を行っている日本語教育部の先生方です。また、その先生方と肩を並べて活動中に活躍してくれるのが、何と、子ども達です。それは、各学年スペイン語のわかる子ども達も居るからです。両親または片

方の親がメキシコ人あるいは他の外国の方だと日本語とスペイン語両方を理解していません。交流学习などでは、それらのリトル通訳者が大活躍です。



『交流学习の様子』

最近の行事では、7月に行われたメキシココースの卒業式があげられます。

幼・小・中の卒業式には日本コースの子ども達が呼びかけや歌で参加しました。日本コースの子ども達の活躍にメキシココースの保護者の方々も目を細めていました。

特に、7月4日に行われたメキシココース小学部の卒業式には、メキシコの教育大臣との会見を前にした前渡海文部科学大臣もスケジュールを割いて出席していただき祝辞までいただきました。卒業生や保護者の方々とも大変感激していました。その前には、日本コースの授業も参観していただきました。帰りには、日本コース全校児童生徒による学院歌で見送りを行いました。



『渡海前文部科学大臣のメキシココース卒業式での祝辞の様子』

以上のように、教育活動内容も大変バラエティに富んでおり、毎日充実した学校生活を送っています。

しかし、問題点も3つほどあります。

一つ目は、他の日本人学校と同じように、

大半の児童生徒は、送迎バスを利用するために、下校時間が決められているということです。早い学年で午後1時、遅い学年でも午後4時に下校になります。したがって、限られた時間内での教育活動に先生方の創意工夫が求められるということです。

二つ目は、派遣教員が2年から3年の期間のために児童生徒や学校を理解したところに帰国しなければならないということです。それは、子どもたちにも言えることで、保護者が駐在員の場合、2年から3年で帰国又は他の国への転出と言うこととなります。まさに、「一期一会」。一日一日が真剣勝負です。

最後には、児童生徒数の減少です。多いときには、300名以上(1994年308名)の児童生徒数でしたが年ごとに減少になり145名(8/27現在)です。これには、教員の数にも影響してきます。今年度は、派遣教員が2名減になりました。在外教育施設にとって教員1名の減は、日本の学校以上に大きな影響を受けます。

ここでは、何かあれば、教育委員会にまたは、隣接校の校長へと簡単に相談するわけにはいきません。

限られた教職員の中で知恵を出し合い、様々な問題に対処しなければなりません。まさに、教職員の「和」が大切です。

「一人の百歩より、百人の一步」が肝要です。

また、「教育の最大環境は、教師自身である。」とも言われます。一人一人の教員が「一騎当千」の力ある教育者として成長しなければなりません。

日本メキシコ学院の建学の精神は、「日本メキシコ両国民の相互理解の増進と教育文化の交流。」

・世界の平和と繁栄に貢献し得る国際性豊かな、且つ両国民にとって有為な人材を育成すること。」です。

今後、この建学精神を念頭に置きながら学校経営に当たって行きたいと思います。

NHKラジオがやってきた！ 「地球ラジオINブサン」に全員出演

釜山日本人学校

平成20年10月4日(土)5日(日)、NHK第一ラジオで放送されている「地球ラジオ」の公開生放送が、釜山日本人学校講堂をスタジオにして全世界に放送されました。

この「地球ラジオ」は、海外で活動している日本人を紹介する番組です。

今回は、スペシャル版で放送時間枠も、通常枠を拡大して16時5分～18時50分の約3時間枠です。

日本人会の皆様方や保護者の方々も多く参加され、延べ200名を超える盛況ぶりでした。

この番組の人気コーナー「僕たち、私たち元気だよ」(17:05-17:28に放送)に釜山日本人学校児童生徒36名全員がそれぞれに役割を分担して出演しました。

学校紹介では、小学部6年生(1日目)、中学部(2日目)がインタビュー形式で紹介しました。学校行事や、学校生活への思いなど海外事情を詳しく紹介できました。

学年代表児童・生徒の作文コーナーでは釜山での暮らしぶり等を発表、続いての全員合唱は、「校歌」(1日目)、「故郷の春(韓国語*コヒャン エ ポン)」(2日目)を披露しました。

番組内では、この番組を聞いている日本にいる旧職員からのメールや過去に在籍していた子どもたち、日本の親族関係者から等のFAX紹介も多数あり、終始和やかな雰囲気にも包まれていました。

子どもたちにとって、自分の思いを電波に乗せて、全世界に届けるという良い体験ができました。



特別寄稿

登録者研修会に参加して

島根県松江市立玉湯小学校
(元ブダペスト日本人学校校長)

校長 三代 喜政

1. 在外教育施設より帰国して

私は、本年3月にブダペスト日本人学校(ハンガリー)での3年間の勤務を終え、松江市の学校に勤務している。

ブダペスト日本人学校での3年間は、新設校への派遣ということで緊張と重責の中での勤務だったように思う。33名の児童生徒数でスタートした学校も、帰国時には90名以上になり、校長としての責務の一つを無事為し終え、新校長に引き継ぐことが出来た。

国内の学校の多忙さについては、予期されたことであった。新任校での職務も対外的なものも多く、しばらくは戸惑いながら日々の仕事に取り組んで来た。

在外教育施設から帰国した教員の話題には、「日本は忙しすぎる。」と言う声をよく耳にするが、そんな声にも納得させられる。しかし、在外教育施設で求められているものと国内で求められている職務内容については、いろいろな面で共通点や相違点があると思われる。ただ、在外教育施設での貴重な経験を国内でどう生かしていくかを考えることも、派遣教員にとっては一つの課題ではないかと考え自分なりに取り組んでいる。

2. 登録者研修会に参加して

あつと言う間に過ぎた1学期であったが、8月に行われる「平成21年度在外教育施設派遣教員登録者研修会」へ指導助言者としての参加の依頼を受けた。私が・・と思ったが、何かお役に立つことがあればと参加させて頂いた。

(1)分科会での意見交換

分科会では校長・教頭・教諭がそれぞれグループ別に演習課題について考えを述べ合うというものだった。私は、教諭のグループで、次のような2つの課題が与えられた。

それぞれ在外教育施設ではよく起こりうるかもしれない。概要は

①新任校長と3年目の教員との意見の相違からくる対立に、新任教員としてどう対応するか。

②マンネリ化した現地理理解教育の改善を指示された新任教員としての対応

この2つの課題について、個人の考えをまとめた後、グループ討議を行い、3つのグループがまとめて意見交換を行うという流れで分科会は進められた。

私が、まず一番に感じたことは、一人一人の先生方が非常に真摯に積極的に課題に取り組み、活発な意見交換がなされていたことである。

多分、国内では直面したことのない課題ではなかったかと思う。交わされた意見の中には、よりよい人間関係の構築、校長の教育方針への支援、児童生徒を中心に考えた取り組み、など考えられる意見はほとんど網羅されていたように思う。

この話し合いでは、基本的に結論というものはなく、様々な問題意識をこの時期に持ち、赴任後に活かしてもらおうということが主な視点となっていた。そう言う面においては、この分科会の目指していることは達成されていたように思われた。

(2)指導助言者として

指導助言者という大役を担ったわけだが、演習課題、話し合い等について改めて自らの経験を踏まえ、次の点についてお話しをさせて頂いた。

①違いの認識

在外教育施設は、日本国内の学校と同じ部分もあるが、全く違う面も多いという認識をもつことが必要である。

まず在外教育施設は、その国の在留邦人・企業、大使館をはじめ関係機関の尽力によって設立、運営される学校であることを認識しなくてはならない。そこには大きな期待と要求が課せられる。

また在外教育施設では、その国の法律に基づく教育活動や、治安状況に対応した学校運営がなされる。そのため国内では当然出来ることや行われていることが困難な場合も多くある。

このように、国内の学校とは大きく違う点が多々あるという認識をもつことが必要である。

②経営参画意識

少ない教員数で、小中の授業や学校行事を行っていく。そのため、一人一人の教員が自らの校務分掌を責任を持って遂行していかななくてはならない。「わかりません。」「できません。」は通らない。自らの能力を最大限に発揮し、学校全体を動かすという意識が必要だと考える。一人一人の教員の果たす役割は、日本に比べると非常に大きい。

③危機管理

学校における危機管理については、マニュアル等用意されているので、それに従って行動していけばよい。

私がそれ以上に大切だと考えることは、自己の危機管理意識である。当たり前のことだが、病気やケガで学校を休むことになれば、代わりの教員はいない。また、自動車を運転し事故に遭えばその対応でも大変な労力を自分だけでなく、多くの人が費やす。学級崩壊が起これば、学校への信頼を失う。

国内では、いろいろな方策で対応できることが在外教育施設ではとても難しい場合が多い。様々な面で、自己の危機管理を大切にして欲しい。

(3)まとめとして

来年度派遣される先生方に、お願いしたいこととして、次のようなことを述べた。

- ・各都道府県において推薦され、選ばれた教員であるという自覚と誇り、責任を持って赴任して欲しい。

- ・自分の持つ能力、経験を最大限に活かし、協調性とリーダーシップをバランス良く発揮することが大切である。

- ・現地採用教職員は、学校を支える屋台骨的存在。学ぶことは積極的に学び、教えてもらう姿勢を持つことが必要である。

- ・大切にしたい5Kとして

健康、危機管理、勤勉、家族、交流＋観光

3. 最後に

登録者研修会に参加しての印象は、さすがに優秀な先生方が集まっているということだった。在外派遣への不安や期待の入り交じった表情の中に、派遣教員として精一杯頑張ろうという強い思いが感じられた。

各在外教育施設が、そんな先生方の力で一層発展・充実していくことを願いたい。



事務連絡

発達障害教育情報センター(Webサイト開設)について

特別支援教育課発達障害支援係

(独)国立特別支援教育総合研究所では、本年4月に、発達障害のある子どもたちの教育の推進・充実に向けて、発達障害教育情報センターを設置しました。

本センターでは、発達障害に関わる教員及び保護者をはじめとする関係者への支援を図り、さらに広く国民の理解を得るために、各種情報提供や理解啓発、調査研究活動を行うことを目的としています。

去る8月27日に、各種情報を一括して提供するWebサイトの運営を開始いたしました。

当Webサイトでは、発達障害に関する最新情報や教員研修用講座、教材教具・支援機器、海外渡航する障害のある子どもや日本人学校関係者を支援する情報等を配信しています。

(独)国立特別支援教育総合研究所のホームページから閲覧できますので、ぜひご利用ください。

今度とも、教育委員会、大学等の研究機関、保護者団体、NPOなどの関係機関及び厚生労働省の発達障害情報センターとも連携を図りながら、情報提供の充実に努めてまいります。

○発達障害教育情報センターWebサイトについてはこちら → <http://www.nise.go.jp/>

((独)国立特別支援教育総合研究所HP、画面右側の「発達障害教育情報センター」のバナーからお入りください。)

定期報告書及び現地教育事情等に関する調査・研究最終報告書の提出について

教職員派遣係 氏名 新井 慶子

20年度も4ヶ月余りとなりました。帰国される方は、帰国の準備をされていると思いますが、年度末には、定期報告書等の提出もございますので、遺漏のないよう実施して下さい。御提出いただく際の注意事項をまとめましたので、参照または

参考にして下さい。

◆自己申告書提出上の留意点

①実施について:全派遣教員が実施対象となります。「Ⅲ.職務の評価(基準日:3月31日)」を記入して下さい。なお、年度当初及び8月1日で「Ⅰ.基本情報」、「Ⅱ.職務の目標・評価等」については、記入いただいていることと思います。

②提出期限:評価基準日より1ヶ月以内。

③留意点:平成21年度当初の目標設定のみを記述したものは、提出不要です。自己申告書は、年度末に年度中の申告が全て完了したものを提出いただきますので、20年度分を提出して下さい。

◆業績報告書提出上の留意点

①実施について:全派遣教員が実施対象となります。評価基準日は、3月31日になります。「1.基本情報」から「4.総評」まで全て記入して下さい。

②提出期限:評価基準日より1ヶ月以内。

③留意点:校長が、当該日本人学校等の全ての派遣教員の報告書をとりまとめて提出して下さい。よって、学校運営委員会委員長に作成を依頼する管理職分につきましても、厳封の上、教諭分と合わせて御提出下さい。

年度内に派遣期間を短縮又は満了して帰国する派遣教員については、帰国する日の前々日に自己申告書の自己評価及び業績報告書の業績報告評価を行います。

実施方法等詳細は、手引にあります「3派遣教員の身分、処遇等」の「3-3日本人学校等派遣教員の実施について」や「日本人学校等派遣教員の定期報告実施要項」を御参考下さい。

◆現地教育事情等に関する調査・研究最終報告書提出上の留意点

①調査・研究の実施は、毎年度、全派遣教員が各自行います。よって、管理職も実施対象となります。なお、帰国校長等報告会での提出物とは、異なりますのでご注意ください。

②文部科学省へは、帰国する年度に最終報告書を提出する。実施計画書(別紙様式1)、年度報告書(別紙様式2)は、校長宛の提出物とし、文部科学省への提出は、不要です。

③最終報告書を提出する際に、必ず最終報告

書一覧表(別記様式4)を添付する。校長は、帰国する全派遣教員の最終報告書ををとりまとめの上、最終報告書一覧表を作成・添付して下さい。

実施方法等の詳細は、「在外教育施設派遣教員の赴任国における現地教育事情等に関する調査・研究について」を御参考下さい。

最後にお願いになりますが、報告書提出の時期は、各部署への提出時と重なりますので、紛失防止のためにも、「自己申告書」・「業績報告書(管理職分も含む)」・「現地教育事情等に関する調査・研究最終報告書(別記様式4の一覧表を含む)」の3点をひとまとめにし、他の書類と混ざらないようにしてご提出いただけますようご協力お願いします。

国際教育課「気球船」編集部

本誌へのご意見、ご感想をお待ちしています。下記までご連絡ください。

連絡先:E-mail:kokukyo@mext.go.jp

こちらも随時募集中です。

○投稿記事

(原稿料は出ません。ご了承ください。)

○新規配信依頼



《編集後記》

12月に入り、東京もクリスマスシーズン一色になり、世界各地でもクリスマスのイルミネーションが輝いていることと思います。クリスマスから年末にかけて気忙しくなりますが、皆様、どうぞお身体ご自愛ください。

さて、気球船は今年は風邪をひいたのか、6月号を最後にお休みをいただいておりますが、今月号から無事復帰して発行することができました。休んでいる間にいただいた気球船を待ち望むたくさんの方の声、ありがとうございました。今後は二ヶ月に1回のペースで気球船の発行を継続していく予定です。

今後ともよろしく願いいたします。

(11・12月号担当 教職員派遣係)

～11・12月号の内容～

【巻頭言】 -----1

○平成20年度東アジア・大洋州地区校長研究協議会に出席して-----1

国際教育課長 大森 撰生

【トピックス】 -----2

○平成20年度補習授業校派遣教員研究協議会に参加して-----2

国際教育課課長補佐 内藤 雷太

○平成20年度中南米地区校長研究協議会に参加して-----3

国際教育課専門官・(併)教職員派遣係長 小寺 和宏

○平成20年度東アジア・大洋州地区校長研究協議会に参加して

～5,000の瞳とタピオカ畑と

36人の Captain cook ~ ---5

企画調査係 山本 剛

【世界の窓】-----6

○ビバ、メヒコ! ----- 6

日本メキシコ学院日本コース 校長 齋藤秀峰

○NHKラジオがやってきた!

～「地球ラジオINプサン」に全員出演～ --- 8

釜山日本人学校

【特別寄稿】 -----8

○登録者研修会に参加して-----8

島根県松江市立玉湯小学校

(元ブダペスト日本人学校校長)校長 三代 喜政

【事務連絡】 -----10

○発達障害教育情報センター(Webサイト開設)について-----10

特別支援教育課発達障害支援係

○定期報告書及び現地教育事情等に関する調査・研究最終報告書の提出について---10

教職員派遣係 新井 慶子

